

第6章 豊成上神原遺跡の調査

第1節 遺跡の立地と層序

1 遺跡の立地(第2図、PL.68・69)

豊成上神原遺跡は、大山北麓から手指状に派生し、日本海に向けて緩やかに傾斜する丘陵上に位置する。これらの丘陵は大山山系に源を発する多数の中小河川の浸食を受け、放射線状に開析されたことにより生じたものであり、丘陵帯に入り組んだ大小の尾根・谷地形が形成される。調査地の標高は概ね63～67mである。

本遺跡を含めた周辺一帯は広範囲にわたって大規模な圃場整備がなされ、現況では比較的起伏の少ない地形が目立つ。本遺跡の東方約200mには南北に狭隘な谷筋が走り、南に少し遡ると小竹第2農免農道に堰き止められるように茂九郎持池が存在する。この谷を隔てて東側に豊成上金井谷峰遺跡、更に深い谷を隔てて東に松河原第2・第3遺跡が位置する。本遺跡より西側も東側同様に圃場整備により改変された起伏の少ない地形が続き、豊成叶林遺跡が位置する。カナクソ溜池を有するやや深い谷地形を境に倉谷荒田遺跡が隣接し、更にやや離れた西方には倉谷西中田遺跡が位置する。

本遺跡調査前の状況は芝畑として利用されていた。平成23年度調査地内には、本来南西から北東に延びる西側の谷と、その谷に向かって南から延びる東側の谷が存在していた。これらの谷を挟むように尾根状の地形が存在していたものと考えられるが、削平、盛土等による大規模な造成がなされ、東に向かって緩やかに傾斜する比較的平坦な地形に大きく改変されていた。現況ではどちらの谷も比較的なだらかで小規模に見てとれるが、降雨時などに丘陵南方から流れ込む水量は豊富で、複雑な開析作用の一端をうかがわせる。

2 調査地内の土層堆積(第143～145図、PL.70・71)

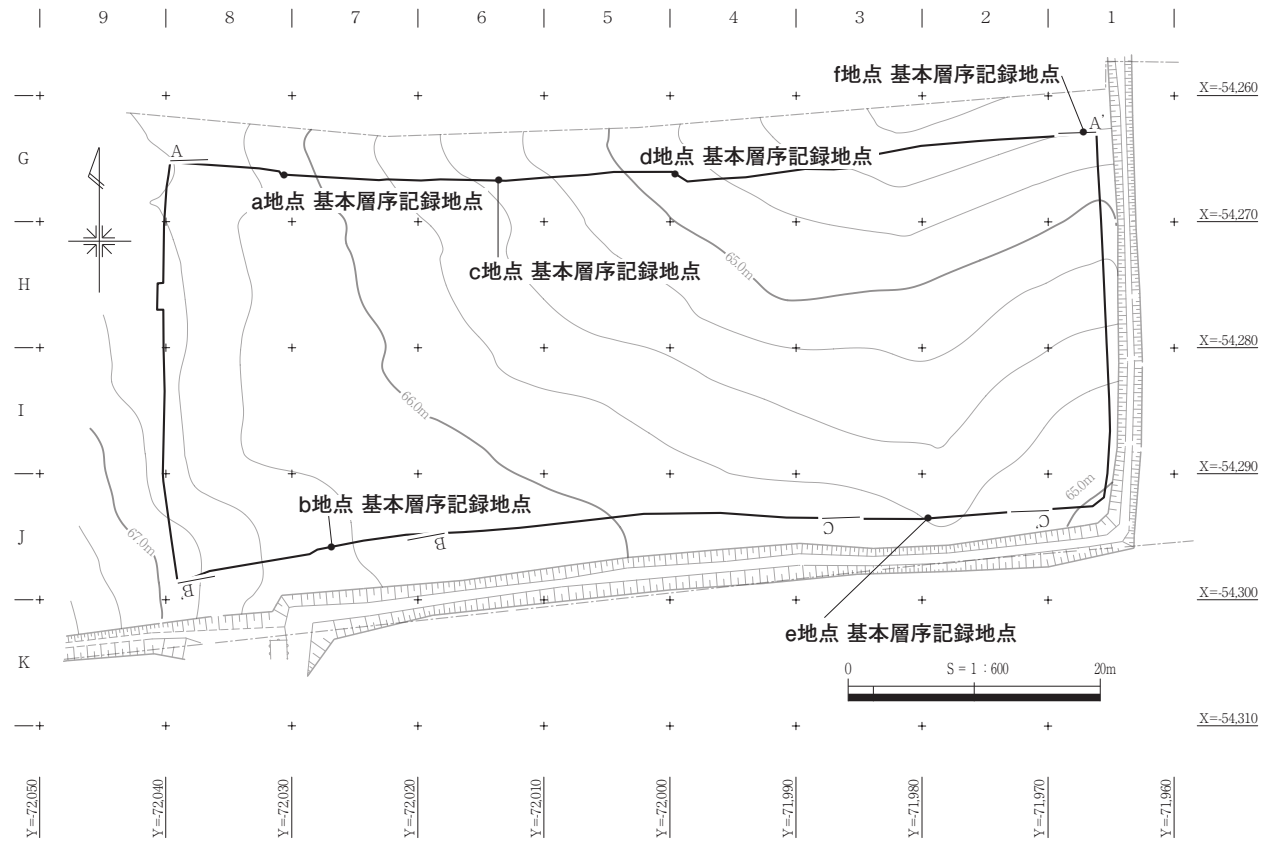
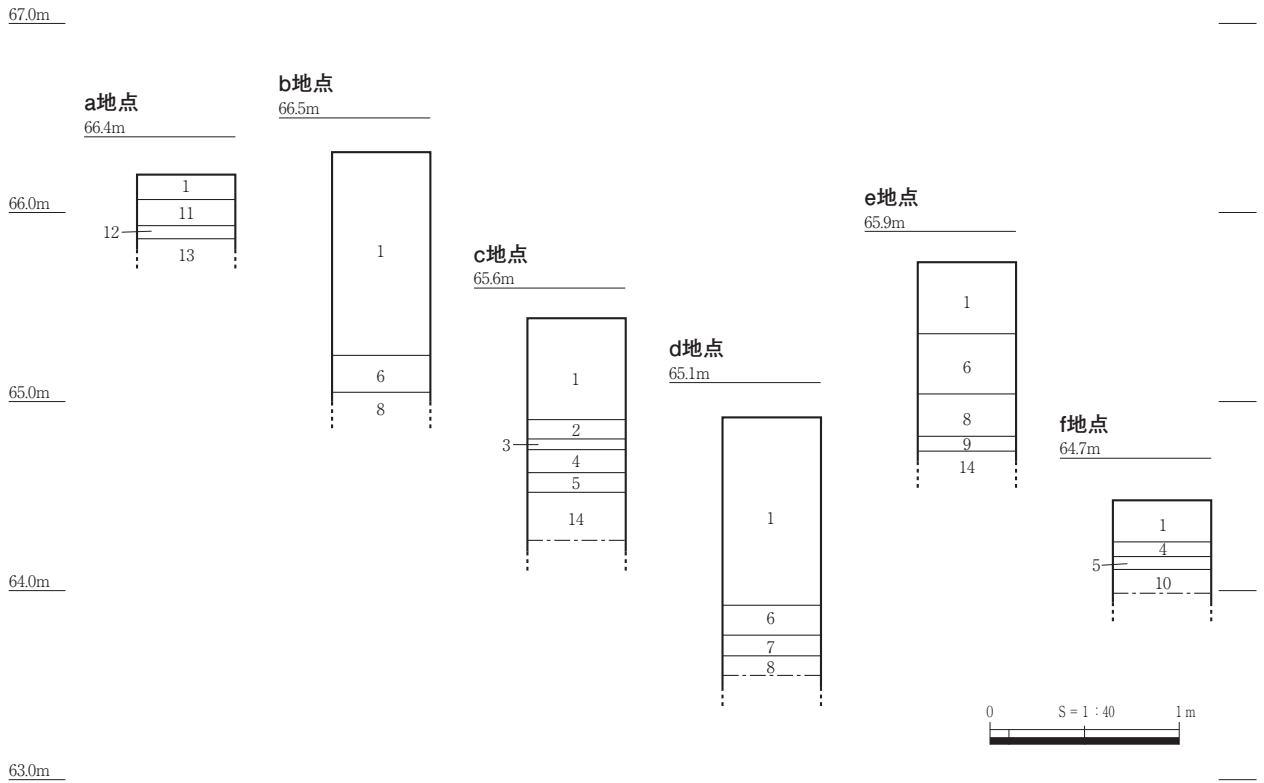
調査地内の堆積については、調査地北壁、南壁の断面を利用して基本層序の記録を行った。以下その概要を述べる。なお、平成21年度調査報告では基本層序の層位表記にローマ数字を使用しているが、混乱を避けるために平成23年度調査ではアラビア数字を使用した。また、平成21年度調査の基本層序との対応関係は表62に示し、文中にも括弧書きで表記を付け加えた。

表63 基本層序対照表

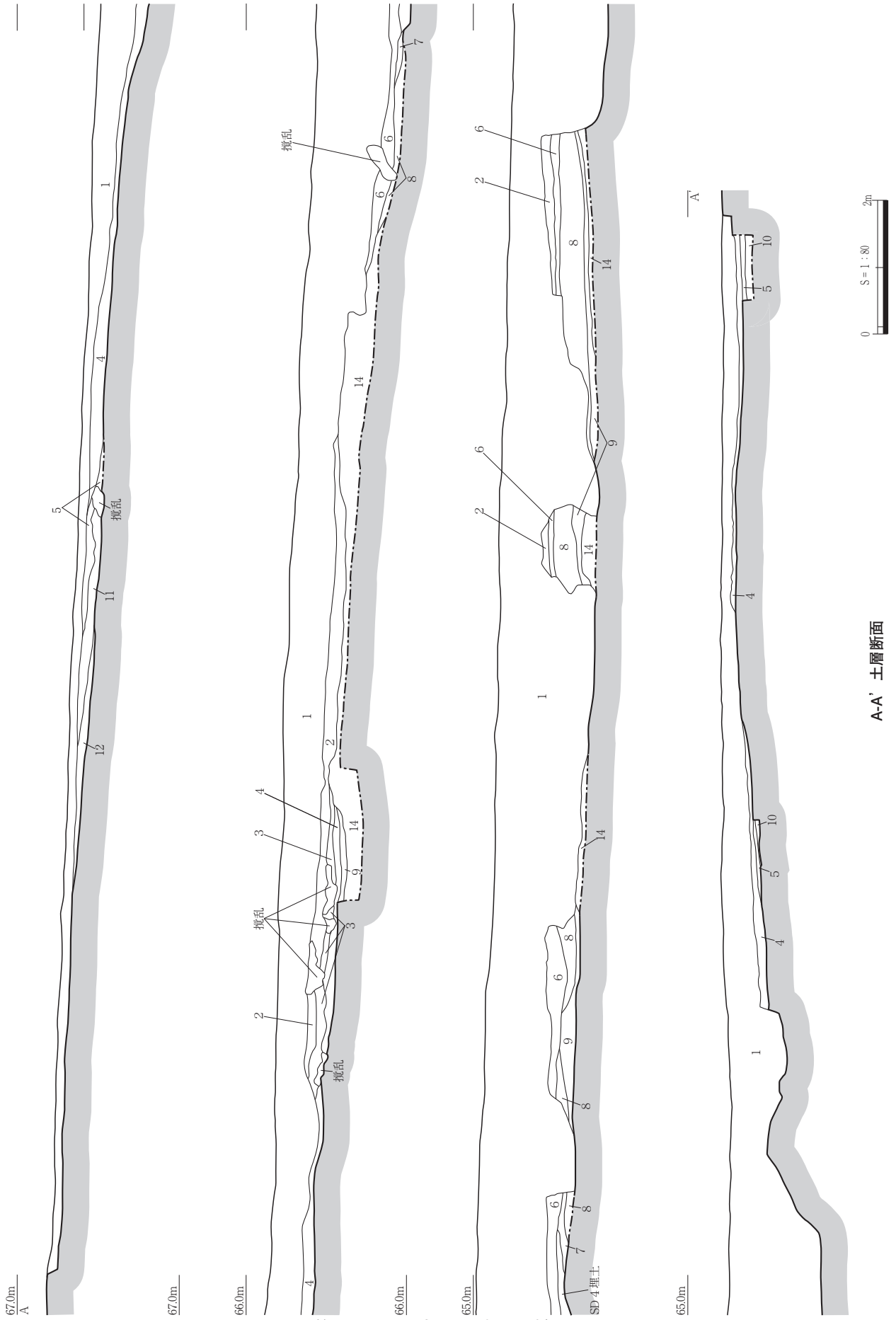
平成23年度	平成21年度
1層	I層
2層	—
3層	—
4層	V層
5層	VII層
6層	—
7層	—
8層	—
9層	—
10層	VIII層
11層	—
12層	XI層
13層	XII・XIII層
14層	—

- 1層：表土。調査地全域に広がる耕作土および造成土などからなる堆積である(平成21年度調査I層に対応)。
- 2層：黒褐色土(10YR3/2)。調査地北壁付近、北西丘陵部から東へ続く緩斜面の狭い範囲だが、1層下に最大20cmの厚みで堆積する。ややシルト質で、微細炭化物粒及び鉄分が若干混じる。遺物の出土、遺構の存在ともに認められない。
- 3層：暗褐色土(7.5YR3/4)。調査地北壁付近、北西丘陵部から東へ続く緩斜面の極めて狭い範囲だが、2層下に最大15cmの厚みで堆積する。鉄分の沈着が多い。遺物の出土、遺構の存在ともに認められない。
- 4層：黒色土(10YR1.7/1)。調査地北壁縁辺、北西丘陵部から東へ

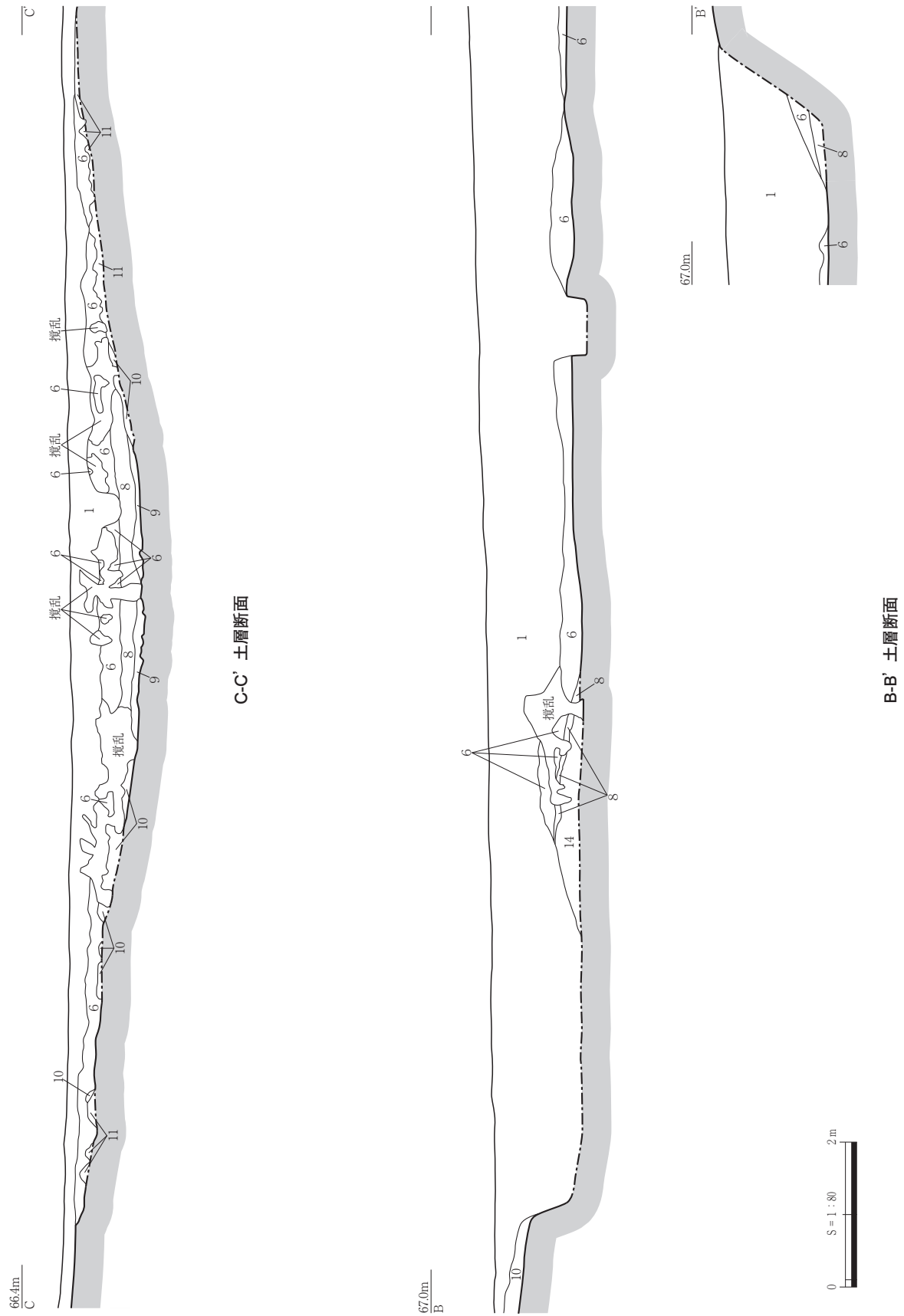
第6章 豊成上神原遺跡の調査



第143図 調査地基本層序柱状図及び調査前地形測量図



第144図 調査地北壁土層断面図



第145図 調査地南壁土層断面図

続く緩斜面部と、北東丘陵部傾斜変換点付近に堆積する。北西斜面では3層下に最大20cmの厚みで堆積する。北東傾斜変換点付近では1層直下に最大15cmの厚みで堆積する。いずれの場所も削平、攪乱部分が多いものの本層の堆積を確認した。当層からの遺物の出土はなく、遺構の存在も認められない。当層を含め、丘陵部でのこれより下層の堆積は無遺物層となる。なお、当層が堆積しない東側丘陵部で検出したSK13・14の埋土は、当層に由来するとみられる黒色・黒褐色土を主体とする。本来的には調査地内の広範囲に当層が堆積していた可能性が高い(平成21年度調査V層に対応)。

- 5層：にぶい黄褐色土(10YR5/4)。ローム漸移層。調査地北壁際、北西丘陵部傾斜変換点付近から東へ続く緩斜面途中部分までと、東側丘陵部傾斜変換点付近に最大12cmの厚さで堆積する(平成21年度調査VII層に対応)。
- 6層：黒褐色土(7.5YR3/2)。調査地西側の谷部南西付近と、東側の谷部に最大35cmの厚さで堆積する。ややシルト質。遺物の出土はなく、遺構の存在は認められない。
- 7層：黒褐色土(10YR2/2)。調査地北壁中央付近、谷部の狭い範囲に最大12cmの厚さで堆積する。ややシルト質。遺物の出土はなかったが、当層上面でSD4を検出した。
- 8層：黒色土(10YR2/1)。調査地内谷部に堆積する。東側谷部で最大38cmの厚さで堆積する。西側谷部は堆積が薄い。当層を含めこれより下層は無遺物層であることを確認し、当層上面まで遺構検出を行った。
- 9層：黒褐色土(10YR2/3)。東側の谷部を中心に最大24cmの厚さで堆積する。
- 10層：褐色土(7.5YR5/6)。粘性が強く、柔らかめのローム層。いわゆるソフトローム層。調査地丘陵部は削平されており、丘陵部の傾斜変換点付近を中心に堆積を確認した。(平成21年度調査VIII層に対応)
- 11層：黄褐色土(10YR5/6)。10層と始良T_n火山灰(AT)に由来する二次堆積と考えられる。
- 12層：にぶい黄橙色(10YR6/4)。粘性が強く、やや柔らかめのローム層。いわゆる白色ローム層(平成21年度調査XI層に対応)。
- 13層：明褐色土(7.5YR5/6)。粘性が強く、硬く締まるローム層。大山中部火山灰に由来する層(平成21年度調査XII・XIII層に対応)。
- 14層：明黄褐色土(10YR6/6)。火砕流由来の堆積層。大小の礫が多数混じる。

第2節 調査の概要(第146図)

調査地及びその周辺は圃場整備とみられる土地造成により地形の改変が著しかった。そのため、遺存状況は不良で、層位によって遺構の前後関係を明らかにすることはできなかった。また、遺物包含層は確認できず、出土する遺物も造成土等、攪乱土からのわずかな資料に限られている。

調査の結果、黒褐色土(7層)・黒色土(8層)上面で溝1条、ソフトローム層(10層)上面で土坑2基、明黄褐色土(14層)上面で溝1条の遺構を検出した。先述のとおり地形が大きく改変され、各遺構面とも後世の影響が及んでいる。

ソフトローム層(10層)上面において検出した遺構は、埋土に4層由来とみられる黒色・黒褐色土が堆積する。これらの遺構の存在は、現在4層が残存しない範囲においても4層が堆積していたことを示し、さらに本来の検出面が4層上面となる可能性を示唆している。



第146図 豊成上神原遺跡平成23年度調査遺構配置図

遺構は土坑2基、溝2条を検出した。遺構密度、遺物量ともに希薄であった。遺構名称については平成21年度調査の報告から踏襲することとし、調査時と報告時で遺構名称が異なるため表1に対照一覧を示した。

土坑は、調査地東側の削平を受けている尾根筋上に浅い土坑(SK13・14)を検出した。溝は、いずれも谷筋に沿うように位置する浅い小溝(SD3・4)である。

遺物は総数20点ほどで、土器では土師器が出土した。弥生土器、縄文土器と思われるものも数点あった。いずれも小・細片で、時期を特定できる特徴を見いだせるものではなかった。ほかには、安山岩製の石鏃、黒曜石剥片も出土した。なお、調査時の遺物取り上げ番号についても平成21年度調査のものを踏襲した。

表64 豊成上神原遺跡遺構一覧表

調査年度	遺構	検出面	遺物	時期	備考
平成21年度	SK 1	VIII層(ソフトローム)上面	-	縄文時代	落とし穴
	SK 2	VIII層(ソフトローム)上面	-	縄文時代	落とし穴
	SK 3	VIII層(ソフトローム)上面	-	縄文時代	落とし穴
	SK 4	VIII層(ソフトローム)上面	-	縄文時代	落とし穴
	SK 5	VIII層(ソフトローム)上面	-	縄文時代	落とし穴
	SK 6	VIII層(ソフトローム)上面	-	縄文時代	落とし穴
	SK 7	VIII層(ソフトローム)上面	-	縄文時代	落とし穴
	SK 8	II層(灰黄褐色土)下、 V層(黒褐色土)上面	炭化材	古墳時代終末期 ※放射性炭素年代測定	製炭土坑
	SK 9	IV層(褐色土)下、 V層(黒褐色土)上面	-	古代以前 ※IV層(古代包含層)に被覆される	
	SK10	III層(暗褐色土)下、 IV層(褐色土)上面	土師器 (甕1点)	古代	
	SK11	I層(表土)直下、 VIII層(ソフトローム)上面	-	時期不明	
	SK12	I層(表土)直下、 V層(黒褐色土)上面	-	時期不明	
平成23年度	SK13	I層(表土)直下、 10層(ソフトローム)上面	-	時期不明	
	SK14	I層(表土)直下、 10層(ソフトローム)上面	-	時期不明	
平成21年度	SD 1	IV層下、V層(黒褐色土)上面	-	古代以前 ※IV層(古代包含層)に被覆される	
	SD 2	I層(表土)直下、 VIII層(ソフトローム)上面	-	時期不明	
平成23年度	SD 3	I層(表土)直下、 14層(火砕流堆積)上面	-	時期不明	
	SD 4	6層(黒褐色土)下、 7層(黒褐色土)及び 8層(黒色土)上面	土師器 (小片1点)	時期不明	埋土 埋め戻し
平成21年度	道路状 遺構	I層(表土)直下、IV層上面	-	時期不明	道

第3節 遺構

1 土坑

SK13(第147図、PL.72)

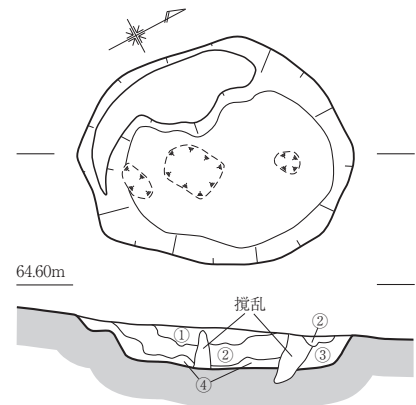
G2グリッド、調査地北東隅、東側尾根部の標高64.4mに位置し、その周辺には南西5.6mにSK14がある。遺構は表土(1層)直下、ソフトローム層(10層)上面で検出した。

平面形は長辺1.45m、短辺1.20mのややいびつな楕円形で、検出面からの深さは0.25mである。

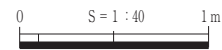
埋土は4層由来と考えられる黒色・黒褐色土を主体とし、堆積状況から自然堆積による埋没と推定する。

本遺構が位置する地点の地形は、後世の土地改変によって本来の尾根地形が削平されほぼ平らになっていた。よって、本遺構が埋没する時点では付近に4層が存在していたことが推測でき、掘削された当時の本遺構の深さは検出時よりも深かったことが考えられる。

遺物の出土はなく、性格を決定づける形態的な特徴等も見出せないことから、本遺構の性格、帰属時期ともに不明である。



- ①暗褐色土 (10YR3/3) 粘性やや強い。しまりやや弱い。
径2～10mmのローム粒・ブロックを多く含む。
- ②黒褐色土 (10YR2/3) 粘性やや強い。しまりあり。
径2～10mmのローム粒・ブロックを少量含む。
- ③黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや強い。しまりやや弱い。
径2～10mmのローム粒・ブロックを多く含む。
- ④黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱い。しまり弱い。
径2～10mmのローム粒・ブロックを多く含む。



第147図 SK13

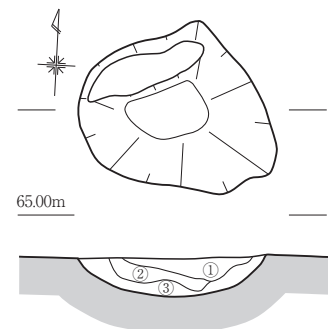
SK14(第148図、PL.72)

H2グリッド、調査地北東隅、東側尾根部の標高64.8mに位置し、その周辺には北東5.6mにSK13がある。遺構は表土(1層)直下、ソフトローム層(10層)上面で検出した。

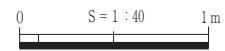
平面形は長辺1.10m、短辺0.81mのややいびつな楕円形で、検出面からの深さは0.22mである。埋土は4層由来と考えられる黒色・黒褐色土を主体とし、堆積状況から自然堆積による埋没と推定する。

本遺構が位置する地点の地形は、先述のSK13同様に後世の土地改変によって本来の尾根地形が削平されほぼ平らになっていた。よって、本遺構が埋没する時点では付近に4層が存在していたことが推測でき、掘削された当時の本遺構の深さは検出時よりも深かったことが考えられる。

遺物の出土はなく、性格を決定づける形態的な特徴等も見出せないことから、本遺構の性格、帰属時期ともに不明である。



- ①黒褐色土 (10YR2/3) 粘性やや強い。
しまりあり。径5mm以下のローム粒を含む。
- ②黒褐色土 (10YR2/2) 粘性あり。しまりやや弱い。
径2mm程度のローム粒を少量含む。
- ③暗褐色土 (10YR3/3) 粘性やや強い。しまりあり。
径2mm以下のローム粒・ブロックを多く含む。



第148図 SK14

表65 土坑一覧

遺構名	平面形	規模 (cm)	深さ (cm)	底面規模 (cm)	性格
S K 13	楕円形	120～145	25	85～110	不明
S K 14	楕円形	81～110	22	36～44	不明

2 溝

SD3 (第149図、PL.73)

G5・H5～6グリッドにかけての調査地北壁付近、西側尾根部から続く緩斜面上を谷筋沿いに南西～北東方向の主軸をとり、谷底から北西へ少し斜面を上った場所に位置する。標高は64.3mの地点で、本遺構の南東3.1mにはSD4がある。1層直下の14層上面で検出した。

検出した範囲の規模は、全長4.72m、幅0.40～0.54m、検出面からの深さはA-A'、B-B'、C-C'間でそれぞれ0.08m、0.07m、0.04mを測る。両端底面の比高差は2cmである。断面形は場所によって不均一で、A-A'間ではA'側が傾斜に沿って深くなるような逆台形、B-B'間ではほぼ逆台形、C-C'間では浅くくぼんだ形状である。

埋土は10・11層に類似するややシルト質の黒褐色土である。本遺構は14層上面で検出したが、1層直下での検出であったことや埋土の状況から推測して本来の遺構面はもっと上であったと考えられる。

溝底面の比高差がほとんどないことから、用排水等の施設であったとは考えにくい。区画溝の一部、耕作痕等の可能性も考えられるが、判断材料に乏しくその性格は判然としない。

遺物の出土はなく、帰属時期は不明である。

SD4 (第150図、PL.73・74)

G5・H5～6グリッドにかけての調査地北壁付近、西側谷底部を谷筋に沿って位置する。標高は63.8～64.2mで、主軸を南西～北東にとる。本遺構の北西3.1mにはSD3がある。7層は北壁縁辺の狭い範囲でしか確認できなかったため、本遺構の大部分は8層上面での検出となった。

検出した範囲の規模は、全長13.70m、幅0.24m～0.42mで、緩やかに蛇行する。検出面からの深さは、A-A'、B-B'、C-C'、D-D'間でそれぞれ0.04m、0.08m、0.10m、0.11mを測る。溝両端底面の比高差は0.49mである。断面形はほぼ逆台形を呈す。

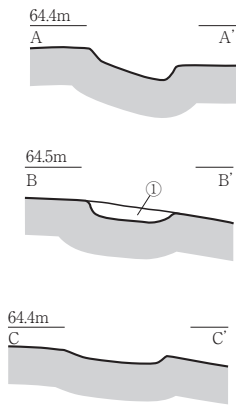
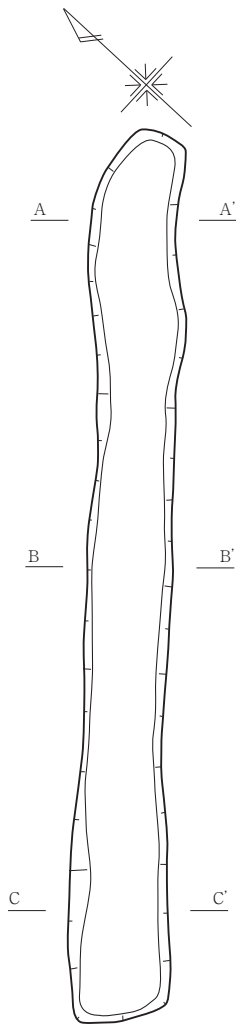
埋土は火砕流由来の14層を中心とするにぶい黄褐色土で、6・7層由来と考えられる黒褐色土も混じる。埋土の状況から人為的に埋められた可能性が高い。また、埋土に混じる大小の礫は埋め戻し土に混じっているものであり、遺構から遊離しているため本遺構に直接関連のないものと考えられる。本遺構周辺には14層が露出している部分が目立ち、本遺構廃絶時にはこれらの土を掘削して埋め戻した可能性がある。本遺構に伴う可能性のあるピット等の遺構は確認できない。

本遺構の性格は判然としないが、平成21年度調査地内には区画溝とみられるSD1・2を確認しており、本遺構は比して規模は小さいもののそれらに関連する可能性はある。

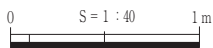
遺物は埋土中から土師器であろう小片が1点出土したが、谷部への流入遺物が埋め戻し土中に混入したものと考えられる。古代以降の帰属になりそうではあるが、時期を特定する判断材料に乏しく本遺構の帰属時期は定かではない。

表66 溝一覧

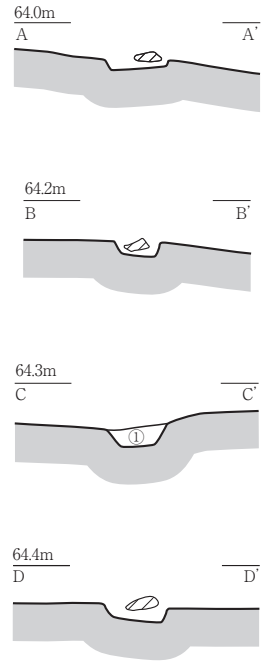
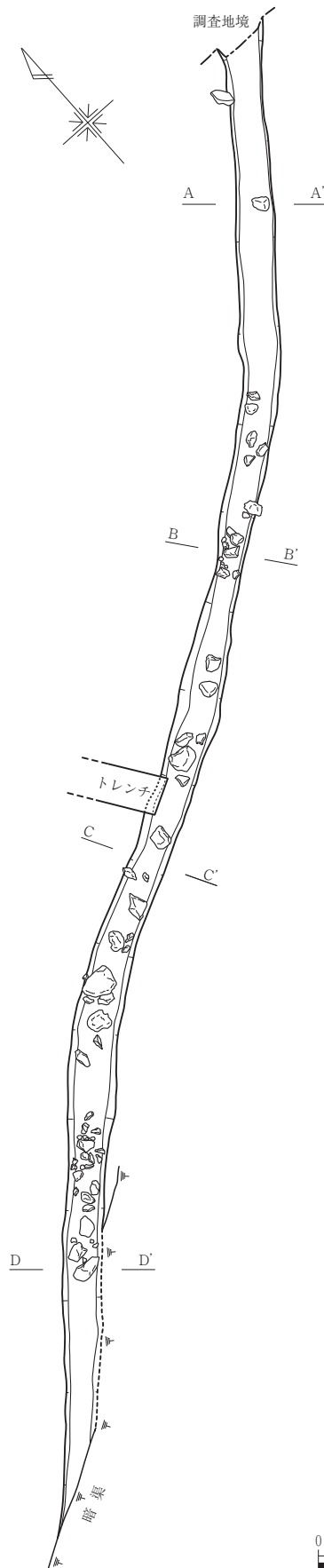
遺構名	グリッド	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	軸	性格
SD3	G5・H5～6	4.72	0.40～0.54	0.04～0.08	N-49°-E	不明
SD4	G5・H5～6	13.70	0.24～0.42	0.04～0.11	N-50°-E	区画溝か



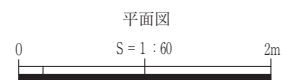
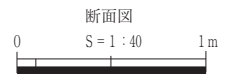
①黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性あり。しまりあり。ややシルト質。径2～10mmのにぶい黄褐色土粒・ブロックを含む。鉄分を少量含む。



第149図 SD3



① にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 径3～10mmの地山礫粒を多く含む。径1cm以上の地山礫を含む。(埋め戻し土か)



第150図 SD4

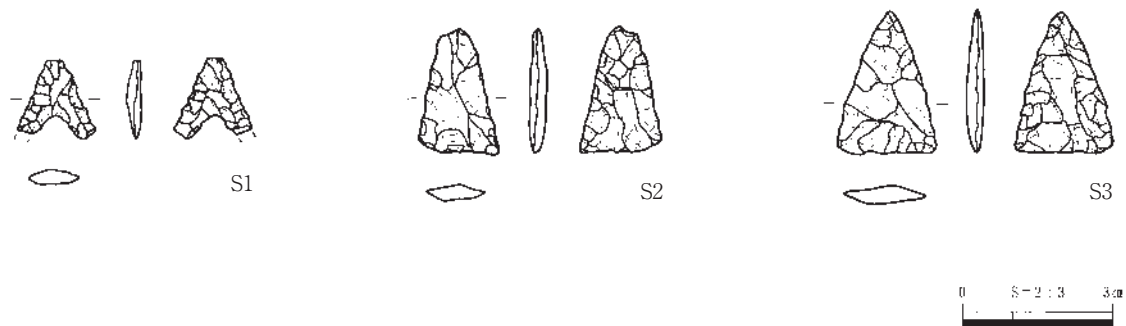
第4節 調査地内出土遺物(第151図、PL.74)

本節では平成23年度調査地内の攪乱土中から出土した遺物について報告する。

平成23年度調査地内から出土した遺物のほとんどが攪乱土中からの出土である。調査の概要でも述べたように遺物の数量は少なく、総数20点ほどである。土器はいずれも小片で、土師器がやや多く、弥生土器、縄文土器と思われるものも数点ある。

石器は石鏃が3点出土しており、以下に図化した。ほかには黒曜石と石英の剥片も1点ずつ出土した。

S1～3については、3点とも石材はサヌカイトと推察される安山岩製である。S1は凹基式石鏃で、鋸歯縁状の加工が施され、表面は全体的に風化が進行している。先端部と基部の片側を欠損する



第151図 調査地内出土遺物

表67 出土石器観察表

遺物番号	取り上げ番号	遺構地区層位名	挿図PL	種類	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
S1	86	I 3 グリッド 攪乱土	第151図 PL.74	石鏃	安山岩	1.60	1.55	0.30	0.43	凹基式。先端部、基部片側欠損。表面風化進行。
S2	93	I 3 グリッド 攪乱土	第151図 PL.74	石鏃	安山岩	2.50	1.60	0.30	1.09	平基式。
S3	88	I 3 グリッド 攪乱土	第151図 PL.74	石鏃	安山岩	2.85	1.95	0.35	1.55	平基式。

が、基部の破面は比較的新しく、後世に何らかの作用によって失われたものと思われる。先端部の破面は表面と同様に風化しており、使用に伴う可能性がある。形態的特徴や風化の進行具合から縄文時代に帰属すると考えられる。

S2・3は平基式石鏃である。最大長はS2が2.50cm、S3が2.85cmと大型で、どちらも平面形は均整のとれた二等辺三角形に近い形状をなす。表面はそれほど風化が進行しておらず、形態的特徴からもS1より後のものと考えられる。本遺跡の東側約300mに位置する豊成金井谷峰遺跡では弥生時代の竪穴住居跡を確認しており、S2・3と類似する石鏃も出土していることから弥生時代に帰属する可能性がある。

第5節 豊成上神原遺跡の総括(第152図)

本遺跡は、既述のとおり平成21年度と平成23年度の2回にわたって調査を実施し終了した。兩年度調査地ともに圃場整備とみられる土地造成により著しく地形の改変がなされており、遺跡の遺存状態は芳しくなかったが、溝4条、土坑14基、道路状遺構1条を検出した。また、総数は少ないものの、古代の土器、鉄滓、安山岩製の石鏃等が出土している。以下、時期ごとに概観し調査結果のまとめとする。なお、遺跡の評価については、平成21年度調査における発掘調査成果(鳥取県埋蔵文化財センター2011)も踏まえながら述べることとする。

縄文時代

縄文時代に帰属する可能性が高い遺構は、形態的特徴から落とし穴と考えられる土坑7基である。すべて平成21年度調査地での検出で、平成23年度調査地での検出はない。これらの土坑は丘陵平坦面から傾斜変換点にかけての丘陵上に展開し、等高線に沿うような配置を示すものを複数確認した。これは本遺跡の東約300mに位置する豊成上金井谷峰遺跡でも同じ傾向を示している。平成23年度調査地内からは落とし穴と判断できる遺構は検出できなかったが、平成21年度調査地と豊成上金井谷峰遺跡との間に位置し地形的にも類似していることから、平成23年度調査地内の丘陵部から傾斜変換点付近にも落とし穴が展開していた可能性はある。

遺物としては、石鏃が平成21年度調査で1点、平成23年度調査で3点の計4点出土している。いずれもサヌカイトと推察される安山岩製で、攪乱土中からの出土により原位置はとどめていない。平成23年度調査地出土の1点は凹基式で縄文時代に帰属すると考えられるが、ほかの3点は平基式で弥生時代に帰属する可能性もある。ほかには、平成23年度調査地東側谷部及び東側尾根部攪乱土中から弥生土器、縄文土器と思われる小片が数点と、平成23年度調査地西側谷部攪乱土中から黒曜石剥片が1点出土している。

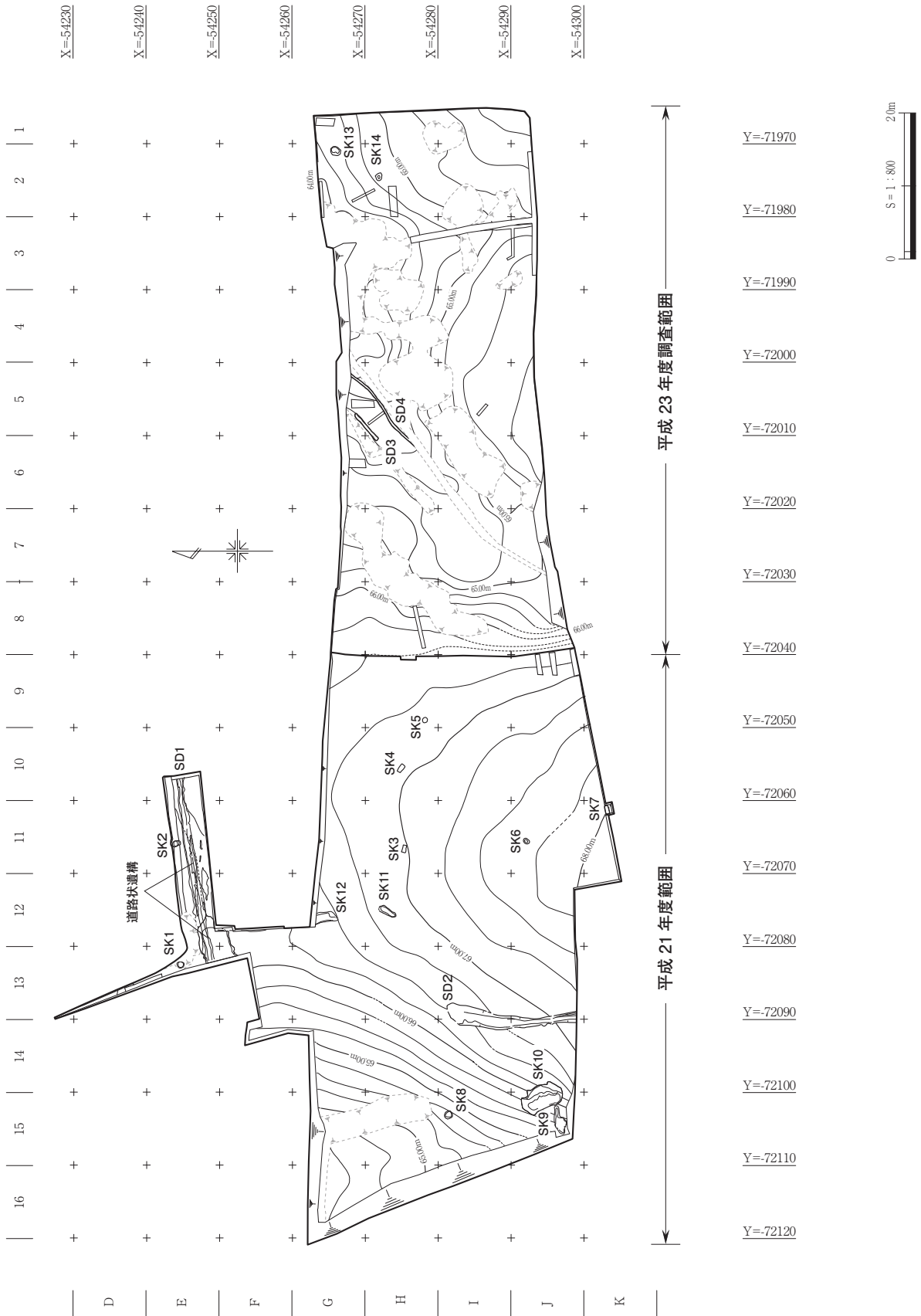
弥生時代

弥生時代に帰属する可能性のある遺構は本遺跡からは確認されていないが、わずかではあるものの攪乱土中から遺物の出土があった。周辺の遺跡では、豊成上金井谷峰遺跡から竪穴住居跡が1棟検出されており、やや距離は離れるものの倉谷西中田遺跡でも竪穴住居跡2棟のほか掘立柱建物跡、貯蔵穴等が検出されている。本遺跡内にかかる丘陵上及び調査地外南側においても弥生時代に何らかの活動があった可能性は示唆しておきたい。

古墳時代後期から古代

当該期の遺構としては、SK8～10、SD1が確認されている。これらの遺構はすべて平成21年度調査で検出されており、平成23年度調査では検出できなかった。SK8は製炭土坑とみられ、放射性炭素年代測定の結果から6世紀後半から7世紀代の結果が得られている。SK9、SD1は土層堆積状況から判断して古代以前に帰属する。SD1は区画溝とみられる。

遺物としては、SK10埋土中から古代に帰属する土師器甕片が出土している。また、遺物包含層(平成21年度調査Ⅲ・Ⅳ層)からは8～9世紀の土器とともに椀形鍛冶滓・流動滓といった鉄関連遺物が出土しているが、兩年度調査ともに精錬・鍛冶関連遺構の検出はなかった。そのほか、平成21年度調



第152図 豊成上神原遺跡遺構配置図

第6章 豊成上神原遺跡の調査

査地攪乱土中から古代に帰属する須恵器坏蓋の天井部が出土したのをはじめ、数量は多くないものの、平成23年度調査地西側谷部以西の攪乱土中から土師器が出土している。平成23年度調査地西側谷部以東で土師器は出土しておらず、本遺跡内においては平成21年度調査地東側丘陵部縁辺が当該期の人々の活動域東端であった可能性が考えられ、あわせてこの丘陵部南側調査地外に活動が展開されていた可能性も推察できる。また、平成23年度調査では、平成21年度調査Ⅲ・Ⅳ層に対応する古代の遺物包含層が確認できなかった。土地改変によって遺物包含層が失われた可能性もあるが、上記のように本遺跡内における当該期の人々の活動域東端が平成21年度調査地東側丘陵部縁辺であったとすれば、この丘陵部以東に遺物包含層が形成されなかった可能性も考えられる。

その他、帰属時期が不明な遺構

ここまで重ねて述べてきたが、本遺跡は調査地全域にわたって大規模な造成、耕作に係わるとみられる攪乱など、各遺構検出面に後世の影響が大きく及んでいる。出土遺物、形態的特徴、層位による判断が難しいものを帰属時期が不明の遺構として扱った。平成21年度調査のSK11・12、SD2、道路状遺構、平成23年度調査のSK13・14、SD3・4が該当する。

SK11～14はいずれも浅い土坑であるが、SK11の平面形は長楕円形、SK12は北側が調査地北壁にかかるもののやや歪な長楕円形と推察される。SK13・14は円形に近いやや歪な楕円形である。いずれも遺構の性格は判断しかねるが、先述したように平成23年度調査地丘陵部及び傾斜変換点付近にも立地的に落とし穴が存在していた可能性は十分考えられる。SK13・14は平成21年度調査で検出した落とし穴の埋土と類似しており、丘陵部が大きく削平を受けていることから落とし穴の可能性も示唆しておきたい。

平成21年度調査検出のSD2は区画溝とみられ、既述のSD1とは検出面を異にするものの、平面的な位置関係、規模、埋土の類似性から両遺構の関連性がうかがえる。平成23年度調査検出のSD3・4は、SD1・2と比して規模が小さく、軸方向にも違いがあるが、平成21年度調査地の東側丘陵部縁辺を意識した区画溝の可能性はある。

平成21年度調査地北側で轍の痕跡を残す道路状遺構が確認されており、周辺遺跡で道路状遺構の確認はされていないため関連は定かではないが、荷車等による物資の運搬が行われていたことがうかがえる。

以上、調査成果を概観してきた。平成21年度調査で、落とし穴が水平方向に延びる獣道に沿って配列された可能性や、近隣に古代の集落が存在する可能性を指摘した。平成23年度調査地内でも平成21年度調査地と同様に大規模な土地の改変がなされており、遺構、遺物とも密度が希薄であった。そのため、上記した可能性を含め当地の様相を十分解明するには至らなかったが、周辺遺跡の調査報告を踏まえて検討する中で、ある一定の成果は得ることができた。今後、調査例の増加により、更に詳細な検討が可能となることを期待したい。

参考文献

- 鳥取県埋蔵文化財センター 2011『豊成上神原遺跡 豊成上金井谷峰遺跡』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書33
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2011『倉谷西中田遺跡』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書36